

田園都市とエソテリズム

吉村 正和

田園都市という言葉を目にして、われわれがまず思い浮かべるのは東京の田園調布である。現在でこそ著名人の住む高級住宅地として名高いが、その起源がイギリス田園都市にあることはあまり知られていない。歴史的に日本の田園都市は、イギリスの田園都市運動の余波を受けるかたちで展開している。イギリスに始まる田園都市運動は、1903年に最初の田園都市レッチワースの建設が開始されてから数年を経ずして日本に伝わってくる。1907年には井上友一など内務省地方局有志によって『田園都市』が出版され、ヨーロッパの田園都市運動の経緯と理念が紹介される。1918年に、第一国立銀行の創立者であった渋沢栄一によって田園都市株式会社が発足し、続いて洗足地区と多摩川台地区が完成する。とくに多摩川台地区はのちに田園調布と呼ばれるようになり、東京の代表的な高級住宅地として定着することになるのである。¹⁾

最初のイギリス田園都市であるレッチワースと田園調布は、中心から放射状に伸びる道路や同心円状の環状道路などが配置されていることなど、構造的には似通った部分があることは確かである。しかし、翻訳言語が、受容文化のなかで意味内容の質的な変容を遂げるように、日本における田園都市は、レッチワース田園都市を支える歴史的コンテクストをほぼ完全に捨て去るかたち状態で建設されている。イギリスの田園都市運動は、19世紀の不健康で喧騒に満ちた大都市から離れ、田園に立脚しながらも都市機能の利点は維持するという新しい都市計画に基づいて展開したものである。結果的には労働者階級というより中産階級のための住宅地として位置付けられていったという経緯はあるにしても、理念的には、ロバート・オーウェンにまで遡る社会主義的な理念と共同体主義を受け継いでいる。また、大部分のひとには信じられないことと思われ

るが、田園都市には、19世紀の欧米を席卷した心霊主義の系譜をも巻き込む時代精神が流れ込んでいる。田園都市運動が日本に導入されるさいには、こうした歴史的コンテクストの部分は切り離されて、当初から中産階級のための郊外住宅地として出発することになる。

1

イギリスの田園都市運動の唱道者は、エベニーザー・ハワードという人物である。ハワードについてはすでに建築学・建築史・社会学の分野で紹介されているが、心霊主義という視点からの言及はほとんどなされていない。ここではハワードの生涯をたどりながら、田園都市運動が心霊主義といかに深く結びついているかを見てみよう。

ハワードは、1850年1月29日にロンドンのシティー、現在は総合文化センターとなっているパービカンセンター付近で生まれる。自営業の両親が共働きであったため、4歳になるとサフォークの私塾に送られる。駅で別れるさい母親は、涙を浮かべてまだ年端もいかないハワードを見送ったといわれる。やがてサフォークからハートフォードシャーに移り、そこで少年時代を過ごす。少年時代にロンドンと農村の両方における生活体験のなかで、不衛生と喧騒のロンドンと自然美に溢れた田園の相違をすでに実感していた。15歳になるとロンドンで事務員として働きはじめ、速記の技術も修得する。1871年、彼が21歳のとき2人の仲間とともにアメリカ合衆国に渡る。ネブラスカ州の（偶然ではあるが、自分と同じ名前の）ハワード郡で農業を営むが、わずか1年で自分には農業の適性がないことを自覚してシカゴに移る。

シカゴでは速記者として生計を立てることになり、速記はその後生涯の生業となる。この頃のシカゴは大火から復興しようとする時期であり、F・オルムステッドなどの指導による都市計画も進められ、中西部の「田園都市」として知られていた。オルムステッドは、その後ニューヨークのセントラルパークの設計で知られるようになる。ハワードがシカゴ郊外住宅地を直接見る機会を得たことが、のちの田園都市構想につながることになる。この時期にハワードは、コーラ・リッチモンドというアメリカの著名な霊媒の影響を受け、アメリカ心霊主義に接近している。

1876年にイギリスに帰国したハワードは、79年頃にロンドンのゼテティカル協会というグループに参加する。この協会（一種のクラブ）では、政治・経済・

社会などすべての問題について会員が交代で短いレポートを朗読し、そのあとで全員が参加して議論する方式をとっていた。ハワードが参加した頃、まだ無名のシドニー・ウェップやG・B・ショーなどが会員として所属していた。1880年2月14日にハワードがレポートを担当することになり、彼は心霊主義に関する報告をしている。ハワードが用意した原稿は通常のレポートとしては長いものであり、議論も盛り上がったために、彼はその続編を用意することになったほどである。

この時のハワードのレポートは、心霊主義の週刊誌『霊媒と夜明け』（1880年4月16日号）に掲載されている。『霊媒と夜明け』はジェイムズ・バーズによって1870年代に創刊され、心霊主義関係の出版物のなかでもっとも多くの部数を誇る週刊誌として1895年まで存続する。バーズは、反キリスト教心霊主義の代表的な人物であり、社会改革や骨相学の分野でも同じように精力的に活動していた。ハワードの論文は、ジョン・ティンダルとトマス・ハクスリーという当時の代表的な自然科学者を引用しながら、物質と精神（霊性）との相関関係について真面目に論じたものである。引力・光・化学作用などは純粋に物質的な領域に属するものとはいえ、物質と精神の中間的な存在とみなされる。ハワードは、「私たちは、物質であれ力であれ、その本質的な特性については何も知らない。その秘密は隠されたままである」と述べ、現在では超自然的な現象あるいは作用とみなされているものも、科学の進展とともに合理的な説明がされる可能性を指摘している。²⁾

ハワードは、自然界にはその影響が物質に作用した結果を通してのみ人間が確認できる心霊的な力（Psychic Force）があること、この力が物質と連動して作用する場合には物理的な力として現れるが、思考や感情に作用する場合には精神的な力として認識されるという見解を示している。霊性あるいは心霊は、物質的な現象や作用を通してのみ意識されるのであり、われわれはそれを冷静に観察することによってその存在を確かめることができる。また、現在その存在を確認できないとしても、「人間の理性能力が完成された水準にまで引き上げられた」とときには意識されることになる。

長いレポートの結論においてハワードは、「人間が肉体とは独立した霊的な存在をもっているかどうかは、事実に基づき、その事実からの論理的な推論によって証明されることである」と述べ、「人間には霊的な本性があり、それは物質的な肉体から立ちあがり、翼をひろげて空高く飛翔していく」という確信を表

明している。科学と宗教の融合を心霊主義によって解決しようとするハワードの意欲が感じられる。このレポートにおいてハワードは、「未来の秘密を開く鍵」という表現を使用しているが、この〈鍵〉のイメージはハワードの田園都市の発想にもつながる。

ハワードは1898年に田園都市運動のバイブルとなる『明日：真の改革に至る平和な道』を出版する。さらに1902年に『明日の田園都市』と改題して再版され、広く普及することになる。³⁾ そのさいに『明日』の出版費用を支援したのはコダック写真会社のイギリス支社長ジョージ・ディックマンである。彼はハワードと同じようにコーラ・リッチモンドの崇拜者であり、心霊主義に理解を示していたことが知られている。⁴⁾

ハワードは現在でこそ「田園都市」という概念と結びつけて記憶されているが、彼は最初から田園都市という名称を選んでいたわけではない。ハワードは当初『明日の田園都市』のタイトルを「マスター・キー」とすることを考えていた。現在もそのタイトル・ページの草稿が残っているが、「マスター・キー」の図版もすでに用意されていた。その中央に「科学：宗教」とあり、ハワードの田園都市プランが「科学と宗教の融合」という主題を中心に構築されていたことが理解される。ハワードは、田園都市においてたんに都市と田園（農村）の結合、あるいは個人主義と社会主義との和解を求めていただけではない。彼は、科学と宗教の融合を通して時代の閉塞状況を打ち破ろうとしていたのであり、その鍵を心霊主義における科学と宗教の融合に見出そうとしていたのである。

2

1910年代にハワードは再び心霊主義への関心を強める。その年の4月14日にハワードは、ロンドン心霊主義者同盟(LSA)の大会において『社会的進歩への心霊主義の影響』に関する講演を行う。この講演は『ライト(光)』(1910年4月30日号)に掲載されている。1880年の『霊媒と夜明け』掲載のレポートから30年後の論文であり、ハワードと心霊主義との長い関係を理解することができる。前者はまだ自分の社会的役割を意識していない30歳のハワードの内面を示しており、後者はすでにレッチワース田園都市を建設するなど田園都市運動の中心人物として揺るぎない評価を受けていた60歳のハワードの内面を示している。

『ライト（光）』はエドモンド・ロジャーズによって1881年に創刊された心霊主義の週刊誌である。彼はメスメリズムから心霊主義に入り、全英心霊主義者協会（B N A S）や心霊研究協会（S P R）にも参加するなどイギリス心霊主義の歴史とともに歩んだ人物である。1883年に国教会牧師であり大学出身の霊媒として著名であったステイントン・モーゼス師によってロンドン心霊主義者同盟が組織されると、『ライト（光）』はその機関誌となる（この組織は「心霊科学学院」と名前を代えて現在まで存続している）。とくに19世紀から20世紀初頭にかけての心霊主義コレクションは著名であり、たとえば『現代の心霊主義』の著者フランク・ポドモアもこの蔵書を利用して執筆したといわれる。

ハワードは『社会的進歩への心霊主義の影響』の冒頭において、「私たちは、霊的な力、すなわち正義・知恵・愛を、眼に見える世界に現れる形を通して、また交際する人々を通して理解するようになる」と述べ、さらに次のように続けている。⁵⁾「社会進歩は、霊的な力が人間の心と精神を經由して社会と産業の領域に現れる結果であり、そうすることにより霊的な力は物質という形に表現される。この形は、霊的な力がさらに大きく完全になるにつれて、より高次の性質をもつようになる」。田園都市運動は、この霊的な力の顕現したものであり、「健康で自由な環境」を提供しながら社会改革を实践する場として位置付けられる。

注目すべき点は、ハワードがこの講演において2度にわたって、アニー・ベサントの『変化する世界』に言及していることである。1910年の時点でベサントは神智学協会の会長であり、このときすでにハワードも神智学協会の会員になっていた。神智学協会は1875年11月17日、ブラヴァツキー夫人を中心にヘンリー・オルコット大佐、ウィリアム・ジャッジらによって設立された教団である。ブラヴァツキー夫人の神智学は1870年代に劇場的娯楽と化していた心霊主義を、ヨーロッパとインドの神秘思想を接合することにより擬似科学の装いのもとに組み直したものであり、その主著『ヴェールを脱いだイシス』（1877）によってヨーロッパの知識層まで浸透しはじめていた。厳密にいうと神智学は心霊主義を強く批判しており、両者は区別して考える必要がある。しかし、ブラヴァツキー夫人自身が心霊主義の有能な霊媒として活動を開始してだけでなく、オルコット大佐含めて、神智学協会の初期会員のほとんどが心霊主義者であったことから、ここでは神智学を心霊主義の流れの中に位置付けておく。ブラヴァツキー夫人自身も、「神智学は真の純粋な心霊主義である」と証言

している。⁶⁾

神智学が科学と宗教の対立を止揚しようとした背後には、19世紀の自然科学が地質学・生物学・物理学などの分野において飛躍的な発展を遂げており、伝統宗教の立場を脅かす状況にあったという歴史的な経緯がある。科学技術の進歩こそ、ヨーロッパ特にイギリスを世界帝国へと押し上げた最大の原因であることは誰の目にも明らかであった。自然科学の進歩の行きつく先は、自然こそ人間の精神現象も含めて一切の現象の背景をなす唯一の原理であるとする科学的自然主義である。この考え方は当然のことであるが、神の啓示や奇跡を中心に構築された伝統宗教の立場を危うくすることになる。しかし一方において、科学的自然主義もまた、伝統宗教が提供していた人間と社会の精神的な安定を別のかたちで維持するという保証は何もなかった。科学的自然主義は、いくら精度を高めていっても、観察された現象を正確に記録し比較して帰納的に得られる法則が限度であり、現象の内部にあって人間と世界を動かす根本原理にまでに立ち入ることはなかったからである。この2つの世界観の対立するなかで、伝統宗教の枠組みを維持しながら、できるだけ科学的自然主義とも調和する新しい世界観が模索されることになる。心霊主義と神智学は、この科学と宗教の対立によって生じた空隙を埋めるかたちで登場してくるのである。

興味深いのは、『ヴェールを脱いだイシス』のサブタイトルが「古代と現代の科学と神学の謎を解くマスター・キー」となっている点である。ハワードが当初考えていた『明日の田園都市』のメインタイトル、すなわち「マスター・キー」という用語は、この『ヴェールを脱いだイシス』からヒントを得たものといえないであろうか。用語だけではなく、(ハワードの場合は神学ではなく「宗教」となっているが)科学と神学を併記している点もハワードと共通している。

ベサントは、ブラヴァツキー夫人の没後、神智学協会の会長として神智学協会を指導することになる。彼女は、若くして英国国教会の牧師フランク・ベサントと結婚するが、国教会の教義に疑問を感じ始めると離婚を決意する。産児制限運動に参加したのち、社会主義者となりフェビアン協会に加わる。フェビアン協会は知的な討論や研究を中心とする団体であったが、ベサントは、マッチ女工の労働争議を支援するなど実際の労働運動の分野においても活躍をする。しかし、現実の社会主義運動に霊的な要素の欠如を感じたベサントは、1889年神智学に帰依するのである。⁷⁾

ハワードの講演に戻ってみよう。彼は、喧騒と汚染にまみれて人間の住むべ

き場所ではなくなった 19 世紀末のロンドンに関するベサントの記述を引用しながら、ロンドンに象徴される近代文明の負の部分解消する手段として田園都市を位置付ける。社会悪を是正するための手段としての革命は人間自身の内的な改革がないかぎり新たな社会悪が生まれるだけである。自己犠牲と利他精神がないかぎり真の意味での社会改革はありえないとするベサントの主張を紹介し、それを受けてハワードは、次のように自分自身の回心の体験を語り出す。

その時私の心に生まれた安堵感を忘れることはできません。それは私の魂だけでなく体をも満たしました。新鮮で歓喜に満ちたエネルギーの源から流れ出してくるような自然の輝きが、私の身体に入り込んできたのです。皆さん、信仰を失い悪に身を任せていた私はそれまで、霊的な力を前に心の扉を閉ざしていました。しかし、私が悪から善へと舵をきり、悪の償いをしたとき、心の扉がずっと開き、霊的な力が流れ込んできたのです。(『社会的進歩への心霊主義の影響』)

この部分はハワードの心霊主義的回心という内面を告白しているという点で重要である。続けてハワードは、この体験の直後に自身の主著(『明日の田園都市』)を完成し、田園都市運動が始まったと述べている。

彼は田園都市という外面的なプロジェクトの背景には自分の心霊主義(この時点では神智学)的な回心という体験があると主張しているのである。1880年の論文においてハワードは、物質的な現象や作用は心霊的な力の現れであるという論説を展開していた。1910年の段階においてハワードは、田園都市という都市建設プロジェクトの背景に自らの霊的回心があったことを示唆している。日本におけるハワードの紹介と受容の過程においては、こうした要素が欠落する傾向にあるが、田園都市と心霊主義(神智学)を結びつける重要な証言と見るべきである。

心霊主義あるいは神智学的な覚醒は、伝統宗教に見られる回心とよく似ている点がある。しかし、後者の場合には、回心の力点が神にあるのに対して、前者の場合には心霊にあることを確認しておく必要がある(神智学の用語では、人間の内部にある神我は「高次の自己」と呼ばれるが、ここでは「心霊」としておく)。イギリス社会主義がけっして経済の改善だけを念頭においた運動ではなく、人間自身の内面の改革を巻き込む運動であったように、田園都市もまた

都市と田園の融合あるいは良質の住環境を用意することにとどまらず、人間を根底からまた内面から改革しようとする運動であったと理解すべきである。

同じ講演においてハワードは、「強制 (compulsion)」を強く排除している。国家や家父長制などの強制が支配するところにはいかなる改革もないことをハワードは強く主張する。強制に代わるものとして、「衝動 (impulsion)」を挙げているが、これはいうまでもなく個人の内面から湧きおこる霊的な力そのものである。

『明日の田園都市』においてハワードは、こうした自分の内面をあからさまには語っていない。そこで彼が表明した公式の立場は、自由主義と個人主義の利点と、社会主義の利点を融合させた「社会的個人主義」である。『明日の田園都市』第9章のエピグラフとして、アナキズムと独裁政治を避けながら個人主義と社会主義が補完し合って理想社会を形成するという『デイリー・クロニクル』の記事が引用されているが、ハワードの論点はほぼこの部分に要約されている。人間には個人としての自由への志向とともに利己心が備わっており、通常の場合には利己心を克服することが困難であるが、それにもかかわらず、個人は協同の精神と調和していかなければならないというものである。

ハワードの社会的個人主義では、資本主義の矛盾を矯正しながらできるだけ個人の自由を確保しようとする。資本主義は、物象化された貨幣によってしか結合することのできない人間関係を生み出し、個人と個人は対立と疎外のなかにおかれる。一方において社会主義は、共同体の論理を個人に優先させようとするために、個人の自由と創造性を歪めてしまう傾向がある。社会的個人主義において、個人主義と社会主義は相互に補完しあって成立するとされるのである。

ハワードは、都市と田園との融合によって田園都市の構想にたどり着いたように、個人主義と社会主義の調和によって社会的個人主義にたどり着く。しかし、留意しておくべき点は、こうした社会的個人主義の背景には、心霊主義(あるいは神智学)と社会改革との結合という考え方が脈々と流れているという事実である。社会主義が人間の真の自由を実現するための手段にすぎなかったように、田園都市もまた人間の真の霊性を完成するための手段であったと位置付けられているのである。

3

田園都市運動と心霊主義との関係について、さらにもうひとつ指摘しておくべき事実がある。ダーウィンと並ぶ進化論者として著名なアルフレッド・R・ウォレスは1865年頃から心霊主義に傾倒し、さらに1881年には土地国有化協会を創設してその会長を務めていた。ウォレスはハワードと古い知り合いであり、心霊主義と社会主義という共通の関心で結びついていた。さらに、1899年に田園都市協会が発足したとき、協会の事務所はウォレスの土地国有化協会の一部を借りていただけでなく、その職員についても経済的な援助を受けていたのである。⁸⁾

ハワードの田園都市構想に流れ込んだ思潮は、当然のことながら心霊主義(神智学)だけではない。田園都市あるいは理想都市に関する文献は、ジェイムズ・バッキンガムの「ヴィクトリア」と呼ばれる都市共同体、ロバート・ベンバートの「ハッピー・コロニー」、パトリック・ゲデスのモデルタウン、B・W・リチャードソンのハイジニアなどさまざまな都市プランの影響、ポート・サンライトやボーンヴィルなどの住宅地やシカゴ時代にハワードが見たオルムステッド設計による郊外住宅地などの重要性、ハワードが田園都市を構想する契機になったといわれるエドワード・ベラミーの『顧みれば』(1888)のもつ意味などについて指摘している。⁹⁾ とくに、『顧みれば』は、人間の精神的・道徳的な進歩を促す共同体(都市)が実現可能であるという見通しを提供したはずである。

さらに、ハワードの田園都市の基本プランに見られる円形構造の源流をさかのぼっていくと、18世紀末のクロード＝ニコラ・ルドゥー設計によるアルケサン王立製塩工場にたどりつく。ルドゥーの製塩工場プランは、管理と支配という政治的な枠組みとは別に、フリーメイソン都市として西欧秘教伝統に繋がる要素を読み込むことも可能である。¹⁰⁾ ルドゥーの理想都市は当初の設計では、円形プランではなく方形プランに基づく構成となっており、この当初プランはオーウエンの理想都市プランに繋がるという見方もある。¹¹⁾ その見方が正しいとすれば、ハワードの田園都市は、オーウエンの「一致と協同の村」とルドゥーの「ショーの理想都市」の両方の遺産を継承しているといえるかもしれない。

ハワードが田園都市の構想を立てたとすれば、田園都市を実際に設計し建設を担当したのはレイモンド・アンウィンである。¹²⁾ フェビアン協会の会員であったアンウィンは、家・家具・衣服・書物・芸術品などが人生の幸福を増すと

いうモリスの芸術工芸運動にも強い影響を受けており、その経歴はレッチワース設計の方向に大きな影響を及ぼすことになる。1904年には、アンウィンとバリー・パーカーとの共同作業によるレッチワース田園都市プランが採択される。それはハワードの幾何学的なプランというより、レッチワースの地勢を考慮しながらモリスの芸術工芸運動の発想を活かした設計であった。それでも、ハワードの田園都市構想の基本プランは、中央広場を中心にして放射状に伸びている大通り、中央広場の周辺に位置付けられた市役所や図書館などの公共建築物の配置、広大な緑地ノースコモン配置などに活かされている。

1919年にはレッチワースに続いて、第2の田園都市ウェリン(ウェルウィンと表記される場合があるが、正しくはウェリンである)が建設される。レッチワースと同じようにウェリン田園都市においても、キャンパスと呼ばれる中央広場の周辺に図書館などの公共建築物が配置され、そこを起点にして整然とした町並みが続く。中央広場は半円形の形状をもち、そこから4本の大通りが伸びて長方形の広大な空間を創り上げている。

現在レッチワースを訪れるとき、たとえば、その代表的な建築物のひとつであり特異な外観で知られる「クロイスターズ」がアン・ロレンスという自由教育に傾倒していた女性によって瞑想センターとして建設されたことを知るとき、そうした建築がレッチワースに存在している必然性に頷くことができる(現在は、「ノース・ハーツ・メイソニック・ロッジ」と呼ばれ、ハートフォードシャーのフリーメイソン地方本部として使用されている)¹³⁾「クロイスターズ」に隣接して、聖クリストファー校という学校が並び立っている。聖クリストファー校は当初(現在の位置ではなく)ブロードウェイにあり、1919年に学校の礎石を据える儀式には神智学協会会長のアニー・ベサントがインド風の衣装をまとして参列した。この事実を考えると、聖クリストファー校の図書館にはブラヴァツキー夫人の肖像画が今なお掛けられているという事実と併せて、(われわれには遠く歴史の彼方に隠れてしまっている)レッチワース田園都市建設の経緯について想いを馳せないわけにはいかない。

注

- 1) 山口廣編『郊外住宅地の系譜：東京の田園ユートピア』（鹿島出版会、1987）192-6 頁。Shun-ichi Watanabe, “The Japanese Garden City”, in Stephen V. Ward, ed., *The Garden City: Past, Present and Future*, E & FN Spon, London, 1992, pp. 76-9.
- 2) Ebenezer Howard, “Spiritualism”, *Medium and Daybreak*, no.524, vol.XI, 16 April 1880. 以下、この論文からの引用はすべてこの刊行物による。さらに、Robert Beevers, *The Garden City Utopia: A Critical Biography of Ebenezer Howard*, Macmillan Press, 1988, p. 16 を参照。
- 3) テクストとしては、Ebenezer Howard, *Garden Cities of To-Morrow*, edited by F. J. Osborn, The MIT Press, 1902; 1965 を使用した。邦訳として、『明日の田園都市』（長素連訳、鹿島出版会、1968）がある。
- 4) Beevers, op. cit., p. 57.
- 5) Ebenezer Howard, “Spiritual Influences Towards Social Progress”, *Light*, 30 April 1910. 以下、この論文からの引用はすべてこの刊行物による。
- 6) H. P. Blavatsky, *The Key to Theosophy*, The Theosophical Publishing House, 1889; 1987, p. 33.
- 7) ベサントとブラヴァツキー夫人との劇的な出会いについては、Annie Besant, *An Autobiography*, The Theosophical Publishing House, 1893; 1999, pp. 310-3.
- 8) Beevers, op. cit., p. 71. さらに、Frederick Aalen, “English Origins”, Stephen V. Ward, op. cit., pp. 45-7 を参照。
- 9) 田園都市に関する邦訳文献として、ウィリアム・アシュワース『イギリス田園都市の社会史』（下総薫監訳、御茶の水書房、1987）ゴードン・チェリー『英国都市計画の先駆者たち』（大久保昌一訳、学芸出版社、1983）R・フィッシュマン『ブルジョワ・ユートピア：郊外住宅地の盛衰』（小池和子訳、勁草書房、1990）邦語文献として、東秀紀『漱石の倫敦、ハワードのロンドン』（中央公論社、1991）西山八重子『イギリス田園都市の社会学』（ミネルヴァ書房、2002）などを参照。
- 10) 三宅理一『エピキュリアンたちの首都』（学芸書林、1989）258-60 頁。
- 11) ヘレン・ロウズナウ『理想都市：その建築的展開』（西川幸治監訳、鹿島出版会、1979）148 頁。「最初の計画」については、ベルナール・ストロフ『建築家ルドゥー』（多木浩二・的場昭弘訳、青土社、1996）62-5 頁、Ruth Eaton, *Ideal Cities: Utopianism and the (Un)Built Environment*, Thames & Hudson, 2002, p. 110 を参照。

- 12) レッチワース建設の経緯については、Mervyn Miller, *Letchworth: The First Garden City*, Phillimore, 1989、アンウィンについては、Mervyn Miller, *Raymond Unwin: Garden Cities and Town Planning*, Leicester University Press, 1992 などを参照。
- 13) V. W. Miles, *The Cloisters Letchworth 1907-1967*, The Lawrence Cloisters Trust, 1967; 1991, pp. 49-57.

(付記 : 注 2、注 5 において言及した *Medium and Daybreak* および *Light* に掲載のワードの論文については、いずれもレッチワース市立図書館を通して Hertfordshire County Archives から入手することができた。記して感謝したい。)